

Title	英語直喩の形容詞と名詞について
Author	磯川, 治一
Citation	人文研究. 6 卷 8 号, p.635-653.
Issue Date	1955
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

英語直喩の形容詞と名詞について

磯 川 治 一

英語直喩に用いられる形容詞は研究社発行の英語学辞典では凡そ百の代表的なものが挙げられているが、実際に用いられる数に至つては数百に上る。私はこの中特に英語直喩でしばしば用いられ、しかも数々の事物、動物にたとえられる形容詞若干に限定して「形状」「色彩」「美醜」「硬軟」「冷暑」「酔態」「確定性」「幸福感」「死」の九項目に分類して、これらを表現する形容詞と、それに結びつく名詞を考察して見よう。

「形状」については心理的に考へて先ず「大小」が基本的なものとされるが、英語の直喩にも *big, large, little, small* が最も一般的な形容詞であり、此中 *big* が *bull, dog, Christmas pig* とような動物名と結びつけられてゐるかと思へば、*Ketherick's pie, bull-beef, ham, Parington pudding* のような食品名と結合する場合も見受けられる。時には *bushel* とした斛の名も用ゐられたりしてゐる。我々日本人が「大きさ」を何かに例える時と比較して、英国人が食品名を連想している場合が多いのは、日英両人間の生活様式の著しい相違を示すものと考えられる。以上は比較的古くから定着して用ゐられたものであるが、英米の作家でも月並な表現にとらわれることなく、豊かな想像力を駆使して「大きさ」をいろいろな事物によつて表現してゐる。筆者の手許にある材料の中から左に一例を挙げて見よう。

“He wouldn't hurt you, Emil,” said Carl persuasively. “He came to doctor our mare when she ate green corn and swelled up most as big as the water tank. ……………” (*Willa Cather : O Pioneers*)

water tank を始終見慣れてゐる目には右のような直喩は極めて効果的で、しかも滑稽味を感じさせる点で読者を動か

す力は強し。

やう big に対して little とさう形容詞の方は Tom Thumb, lass of Kent の二者が一般的であるが、作家でその他の表現を用いた実例はせまき範圍内での筆者の採集したものの中に見当らなす。

large は「実物大」とさう意味の as large as life とさう表現があることは周知の通りであるが、その他に as large as a saucer がある。「目を皿のようにして」とさう日本語の表現があるが此点英語の saucer eye と共に右に挙げた直喩も、日英共通の表現となつてゐることは人間生活になくはならぬ食器が我々の言語生活に食ふこんで来る事を例証してゐる。やう large に対して small の方はどうかとさうと、先きに挙げた Tom Thumb が矢張り用ゐられてゐるが、その他に peas, pin's head, gravel mouse, witterick (=whitrat=weasel) 等、植物、鉱物、動物が揃つて出るが又、flea-bite とさうような言葉も用ゐられてゐる。日本語で微細なことのたとえに「鶉の毛」とか「針」「楊枝」等は用ゐられるが、flea-bite 等の表現は余り上品でない所為か日本人は口にしないが、「蚊の涙」とか「雀の涙」のような言葉で「僅少」を表わしてゐる点、日英両語の相違に興味を感じられる。

「大小」が我々に連想させる様々な事物について、英語では「曲直」に関する直喩が可成り数多い事物と結合してゐる事も見逃せなす。先ず「直」の方の straight に目を向けて見よう。

英語では straight とさう形容詞から生れる連想を単に現実の動物、植物、鉱物、或は製造品ばかりでなく、聖書の中の架空的事物によつても示してゐる。即ち straight と結合する名詞で一般的なもの左に示す通りである。

pillar, young tree, rush, hazel twig, backbone of a herring, steel rod, ramrod, whip, wand, candle, arrow, thread, truth, Jacob's ladder

右に挙げた諸例の中で truth のような抽象名詞が直喩に用ゐられるのは極めて珍しき事である。Jacob's ladder のような例は平素聖書に親んでゐるキリスト教国民の間でなければ、生れて来ないわけである。

さて英米の文学作品を読んでいる中に、右に挙げた型通りの直喩がしばしば用いられているのは筆者も多少驚いた次第であつた。左に英米の男女の若干の作者について例を挙げよう。

Mr. Helstone, standing straight as a ramrod, looking keen as a kite, (Charlotte Brontë : *Shirley*)
Five ridges done, and each one of them as straight as a steel rod. (Liam O'Flaherty : *Spring Sowing*)
He was a splendid figure of a boy, tall and straight as a young pine tree, with a handsome head, and, strong gray eyes, deeply set under a serious brow. (Willa Cather : *O Pioneers*)

The huge white oxen would still be dragging their wains, along the Tuscan roads, the cypresses would still go up, straight as pillars, to the blue heaven. (Aldous Huxley : *The Gioconda Smile*)

右の引用例によつて、straight とさう形容詞がすぐれた文学作品の地の文の中でも直喩として愛用されている事がわかつたが、これに対して「曲」にあたる crooked の方はどうであらうか。

これは文学作品にはあまり見当らなうが、古くから一般に用いられて straight と同じように色々な名詞を伴つて直喩を形成してゐる。例えば horn, crescent, sickle, leg 等のありふれた名詞を始めとして、Robin Hood's bow, Virginia fence, Yarmouth steeple, Tecton Brook のような固有名詞を含む場合もあり、仲々奇抜なものでは letter Z とさうように万人の視覚に最も力強く訴えるものがある。

次に「高低」の方に目を転じよう。英語直喩では「高低」の「高」にあたる tall とか high とした形容詞は直喩中に現れて来るが「低」にあたる low, short については筆者の今迄の採集では残念乍ら見当らなう。不敢取、本稿では「高」について考察しよう。

先づ、tall のうしろは、tree, cedar, poplar 等樹木が用いられるが、其他に chimney, May-pole。更に風変わりな所では grenadier とさうような名詞も用いられてゐる。

high とさう形容詞の方は houses, heaven 等一般的なもの、又宗教的色彩を帯びたものでは、St. Paul's steeple, cathedral, abbey 等があり、固有名詞では Haman, Lincoln 等が用ゝられてゐる。as high as a cathedral を文学作品に用ゝた例としては次のものがある。

It was a pillared grove, as high as a cathedral. (R. L. Stevenson: *The Black Arrow*)

「形状」については尙ふれるべき多数の形容詞があるが紙面の都合でこれを割愛して、「色彩」の面から直喩を眺めて見よう。人間が自己の周囲の事物の形状に異常な関心を持つ結果、言語の中にそれらを採入れるのと同じように、外界の事物の帯びる色彩には一入の驚きにも似た興味をひかれて言語生活に色とりどりの表現を創り出した事は次に述べる直喩とさう一面だけでも充分に明らかになる。

「色彩」といつても、最も基本的な「白」と「黒」とが英語の直喩には断然多い事は、日本語の表現全般にわたつて白黒の世界が多いのと同様である。古くチョーサーも

Blak he lay as any…… crowe. (*Knight's Tale*)

と述べ、更にシホクスピアも同様

Cypress black as eér was crow. (*Winter Tales*, V. iii)

と、鳥と黒色とを結合してゐる点は、日本語の「鳥の濡羽色」と軌を一にしてゐる。

英語では右に述べた crow の他に raven, raven's wing とつた鳥に關した名詞以外に、coot の様な鳥名も用ゝられる。尤も coot は black と結ばれる場合は珍しく、色彩とは關係のない stupid, bald などの形容詞と結ばれる事が最も普通である。

「黒色」は単なる視覚以外に、不快、不吉、不正を連想させることは日英両語共通であつて、英語でも直喩ならずとも black dog, black sheep, black Monday, black-faced 等枚挙にいとまもなく程、黒色には芳しくない連想が伴つてゐる。

る。したがって直喩におしても、「地獄」「死」「悪魔」等が black と結ばれる。即ち Devil, Old Bogie, Lucifer, Tophet, Old Nick, Styx, Acheron, Hades, sin, grave, 等何れも無気味な英語ばかりであるが devil in a comedy, funeral of negroes 等は多少滑稽味のある表現である。

右の例に加えて一般的な「黒色」或は「暗黒」を示すものとしては bag, ones hat, boot, ebony, ink, coal, coal-pit, soot, pitch, oven, sable, sweep, thunder, night 等が用いられる。例えばホーンマンの ebony を用いて黒色の食卓を次のように描写してゐる。

On the summer afternoon of our tale, a small round table, as black as ebony, stood in the centre of the room, sustaining a cut-glass vase of beautiful form and elaborate workmanship.

(Dr. Heidegger's Experiment)

右の描写では黒檀のように黒いテーブルとその上に置かれたカットグラスの花瓶の透き通る様な美しさが対照の効果によつて一層強められてゐる。こうした時の黒色の直喩は花瓶の美しさを印象づけるのに非常に役立つてゐる事がわかる。又 'night' という名詞が、単に暗黒という連想から更に進んで黒色を示すのに用いられた興味深い例としては、

First, as you see, I have coffee, black as night and strong as love.

(Richard Connell: *The Wolf and the Lamb*)
を挙げることにしよう。husband's tea ならぬ、見るからに黒々としたコーヒを night にたとえたことは、後にいつく strong as love という直喩と相まつて聞く相手の心をそそらずにおかなくであらう。

尤も黒色の視覚と更に触覚を感じさせるために velvet を用いた例も見当る。即ち、

The dusty oaks shimmered and glowed, and the shade under them was black as velvet.

(John Steinbeck: *The Murderer*)

と云ふように black と velvet を結合した心理は色彩感の他に velvet paw, an iron hand in the velvet glove 等の成句に含まれた velvet に対する触感を連想したものであろう。

以上二例に相對して black によつて労働者の表情、顔色を描写すると同時に直喩によつてどん底生活の鮮明な印象を讀者にあたえる実例を示して見よう。

The men of all the races lived in the houses of the town. They shuffled in the morning through the muddy streets towards the mine-pit, and returned in the dusk with their emptied dinner pails, their faces black as sinister masks, their bodies dripping sweat, and stooped in weary curves.

(Michael Gold : Coal Breaker)

black によつて生活の不安、希望の消滅、sinister masks によつて人間として生きる権利を奪われた、何か水泡もたどえたい仮に呼吸してゐると云つた半餓死状態がよく描かれてゐる。

「黒」に對して「白」の方も英語の一般表現に於ては white lie, make one's name white again, white hands, white man, white witch 等に見られるように「正直」「潔白」「善意」を示す場合に用ゐられる場合が多く、直喩

His head and his hairs were white like wool, as white as snow.

(Rev. i. 14)

His countenance was like lightning, and his raiment white as snow.

(Matt. xxviii. 3)

It was white as snow in Salmon.

(Ps. lxxviii. 14)

等、聖書に見られるように「純白」感を示すのに「善」が用ゐられてゐる点は、日本語の「雪白」と全く同様である。尤も右の例の中で wool も用ゐられてゐるのは我日本語と事情を異にしてゐる。

英語直喩で「白」と結んで用ゐられる事物としては、snow, driven snow, wool, foam, swan, one's teeth, wax,

tallow, flour, nail, sheet, ghost, lily, clout 等 古へかゝる用ひなり。

The captain on the quarter-deck coldly giving his orders through a countenance white as a sheet.

(Whitman : *The Leaves of Grass*)

Well, there was the three o' them — Mr. Murrant lookin' at Sankey as if he was ready to kill him, an' Mrs.

Murrant as white as a sheet, an' Sankey, as innocent as the babe unborn. (Elmer Rice : *Street Scene*, I)

右の二例は何れも顔色に表われた緊張感或は恐怖の結果を sheet の白さにたとえてゐるので、「雪白」という清淨感を示すものにならう。

文学者は想像の翼に乗れば必ずしも紋切型の直喩にとらえられる事なく、いろいろな表現を自在に駆使して在来の ghost の代りに apparition を用ひた。

She stood in her nightdress, her hair plaited, white like an apparition.

(O'Flaherty : *Wolf Lamigan's Death*)

と述べてほの暗さに浮ぶ寝衣姿の女性の身の毛もよだつて味を巧みに描写してゐる。

The moon was white as chalk, and it swam in the water,.....

(John Steinbeck : *The Murder*)

さえ渡る月光と水面に浮ぶ月影、こうした場面にて、月を白一色に感じて chalk にたとえた自然描写は日本人と全く異つた生活環境からでなければ生じないであらう。

Under the dust and sweat his face gleamed, white as her apron.

(Mansfield : *Millie*)

これなどは相手の顔色を自分のエプロンの白さにたとえた淡々とした表現で、いかにも女流作家のもつこまやかさが現れている。同じ白さをたえとるのに男性の作家になると、いささか事務的な表現になることは次に示す通りである。

Although his hair is as white as this paper and his sun-browned face a road map of wrinkles, he does

not seem old.

(Richard Connell : *Material*)

白黒の世界から本格的な色彩に目を転ずると、英語で最も頻繁に目につくのは「赤」である。この色のたとえに用ゐられる事物も種々様々であつて rose, beet, beetroot, cherry, fox, lobster, salamander, turkey-cock, rat, raw beef, blood, Roger's nose, bloodshot, Tamworth pig, brick, petticoat 等実にいろいろなものがある。たゞは古くはチョーサーも as red as rose とする表現を女性の顔色に用ゐ、シキンスピッチも、

Your colour is as red as any rose.

(2 King Henry IV. II. iv. 27)

と云ふやうに、rose が顔色のたとえによく用ゐられる点、日本語の「顔に紅葉を散らす」と云ふ場合と相似つてゐる。rose は英語とは深い関係があることを示すものゝ一例は O. Henry も女性の顔色の描写に、

(Best-Seller)

.....she turned almost as red as one of the roses on the bushes in the yard.

(The Happy Time)

と云つてゐる事である。又単に顔色のみならず、唇の色を示すのに、Robert Fontaine は、

(The Happy Time)

Yes, yes we know. And your lips like the petals of red roses.

と云つて、rose への無限の愛着を示してゐる。尤も、此作者は同じ作品中で、

Elsie stood up faced Chester, who turned as red as a peony.

と云つたやうに peony を持出してゐる点も忘れられぬ。

(O'Flaherty : *The Painted Woman*)

同じ赤のでも特に男性の頬や顔色を描写するのには beetroot, beet が用ゐられてゐる事は次に示す通りである。

His cheeks were as red as beetroots.

Out of the biggest house, that had a kind of a porch around it, steps a big white man, red as a beet in colour, dressed in fine tanned deerskin clothes, with a gold chain around his neck, smoking a cigar.

(O. Henry : *Supply and Demand*)

幸福感に胸のうずくような思いを心に燃やしている時は、日本人も火を連想するが、英語でも、

They walked on with their faces as red as fire in an agony of happiness. (John Collier : *Mary*)

とさうように「火」の放つ激情を巧に描出している。又我々日本人の言語生活としては一寸縁遠い表現がチョーサーによつて用いられてゐる。即ち、

His berd, as any sowe or fox, was reed.

(*Canterbury Tales, Prologue*)

毛色を異にしてゐるイギリス人なればこゝうした直喩も生まれるのは当然であろう。赤によつて最後に一例を加えよう。

The night express shot, red as a rocket.

(*Willia Cather : The Sculptor's Funeral*)

黒一色に塗りこまれた夜の世界を火の一線となつて驀進する夜の急行列車の様子が手に取るように描かれてゐるのは rocket によつてスピード感が一入深められた為であらう。

先の *white* にゆれておしたが *pale* は最も一般には *death* 又時には *sheet* を伴うが、その他に *ashes*, *cheese*, *parson*, *box* (黄楊) *carnation*, *stone*, *pearl* 等、我々日本人としては意外な名詞も用ゐられてゐる。併し *pale* が *death* と結ばれた時には我々外国人としても力強い描写の力を感じることが次の例の示す通りである。

Gatsby, pale as death, with his hands plunged like weights in his coat pockets, was standing in a puddle of water glaring tragically into my eyes. (F.S. Fitzgerald : *The Great Gatsby*)

with his hands plunged like weights in his coat pockets とさう彼の身振りも相まひつゝ *pale as death* 又さう直喩の人にせまるすこ味は又格別なものである。併し同じ *pale* を用いても次の例はどうであらうか。

He was pale as a creature found under a stone. (John Collier : *Evening Primrose*)

すこ味には一種の清潔感が伴うものだが、石の下からは出る汚らわしい虫けらが *pale* と結ばれてゐるのは我々には

どうしても理解出来ない。

次に green の世界に足を入れて見よう。「目にしみ入るような緑」といつて我々も青葉若葉の緑には一入の魅力を感じているが、英語では summer, leaf 等が用いられて、日本語と一脈相通するものがある。又 emerald といつた鉱物も古くから用いられて、例えば、

.....in sheltered nooks the first shoots of snowdrop or crocus peeped green as emerald, from the earth.

(Charlotte Brontë: Shirley)

の如く、巧な筆致で一陽来復の希望の春を描いている。green のあたえる感じは fresh, flourishing などのばかりとは限らず、「くちばしの黄色」状態をも時には連想させるもので、英語の直喩では as green as a gosling となつて現れてゐる。

yellow が古くからの英語直喩に用いられる事物としては、我々日本人にも容易に理解し得るような butter, orange, straw, saffron, cowslip, guinea 等であるが、現代の作家は必ずしもこれらのありふれた名詞にかかゝることなく独自の表現をしてゐることは次に示す通りである。

His lips were cracked and yellow like those of a corpse. (Liam O'Flaherty: *The Painted Woman*)

She never saw him, but with eyes closed, she could feel that he was yellow like the sunlight.

(Willia Cather: *O Pioneers*)

brown は通例 berry と結合する場合が多い。その他に coffee-berry, cigar, amber, autumn が古くから用いられるが、O'Heny は更に工夫して snuff を用いて男性の肌色を次のように描いてゐる。

"I meets a man one night", said Finch, beginning his story — a man brown as snuff, with money in every pocket eating Schweiner-knuckel in Shlagel's, (Supply and Demand)

grey という色が日本語では灰色とか鼠色又時には鉛色というように、灰、鼠、鉛の三者によつて示されているが、英語では glass が一般的で頭韻を利用したものであろうが、日本人には奇異な感をあたえる。その他の名詞としては、ashes, sea, stone, falcon, badger も用ゝられてゐる。元來 grey という色が極めてさえない、無表情、孤独を連想させる処から石というよう名詞と結合した場合には荒涼たる景色を描出するのに非常に効果的であることは次の実例によつても知られる。

In the dusk, their thatch and their whitewashed walls, drenched with rain that dripped from their eaves, looked as grey and desolate as the stones.
(Liam O'Flaherty : *The Painted Woman*)

最後の blue にあれると、violet, sky, whetstone, sapphire, forget-me-not 等が普通用ゝられる。

さて以上各種の色彩を示す形容詞とそれに用ゝられる直喩中の名詞を考察したが、無色の場合、即ち colourless が直喩に用ゝられた時にはどういふ名詞が来るかと調べて見ると、筆者が今迄に気のついた例は water であつて、次に実例を示しておこう。

Here is a liquid as colourless as water, almost tasteless, quite imperceptible in coffee, milk, wine, or any other beverage.
(John Collier : *Rope Enough*)

They brought with them two quarts of moonshine, a powerful, determined, single-minded explosive, colourless as water and effective as cholera.
(Sinclair Louis : *Mantrap*)

順序にしたがひ、次には「美醜」に關する直喩に目を転じて見よう。先ず「美しさ」を表わす代表的な形容詞としての beautiful は英語に於ては butterfly, heaven, noonday, dawn 等、日本人の美に対する感覚と略々一致する名詞が結ぶひくが、dolphin's eye に至つては我々としては何か異様な感じがする。又反語的な意味で beautiful が Devil, Old Bogie, Lucifer, Satan, Old Nick の様な悪魔と結びつてゐる点も見逃せなす。

beautiful が heaven と結合した例で小供の心理を描写するのに巧に應用されたものに次のようなものがある。

The shining new little engine, beautiful as heaven, was the apple of Orvie's eye; he held it tenderly in his arms. (Booth Tarkington: *Little Orvie*)

Beautiful に次ぐ fair も可成り用ゝられて silver, rose, stars 等と組み合わせになるのが普通であるが、作家は必ずしも定石通りの名詞を用ゝることなく、自由自在に適當な事物を思ひ浮べてゐることは次の実例に示す通りである。

Thou shalt be as fair as a queen when thou wearest it. (Oscar Wilde: *Salome*)

The old men of the village and the young men, and both the dark maidens and the ones who are as fair as pearls, walk back and forth and see its emptiness.

(O. Henry: *The Head-hunter*)

beautiful, fair, に次ぐ pretty も直喩としては as pretty as a picture の形が最も普通であつて、モームは殊に婦人の容貌を描く際に、「水もしたたる」「絵から抜け出したよう」或は「目もさめるよう」な美人を示すのにきまつて as pretty as a picture を用ゝてゐる作家の一人であるが、彼の文章表現については別の機会にふれて見たらと思う。さう pretty は単に美人の描写に限らず、事物を描いた例としては、

Without doubt Monsieur was rich and in that case he might make a canal-boat as pretty as a villa — joli comme un château. [R. L. Stevenson: *Inland Voyage*]

のようにボートの美しさを別荘にたとへてゐる珍しい表現がある。

右に挙げた例は picture, villa のような事物であるが、次に示すような動作なり経験としての kiss が pretty と結合されるにいたつては、我々日本人とは風習が異なるイギリス人でなければ味読不可能な表現となつて来る。

She passes into the dining-room looking as pretty as a kiss.

(J. M. Barrie: *What Every Woman Knows*)

pretty が women と結合した例に、

Matt : Don't you like the horses?

Girl : They look pretty.

Matt : Prettiest things in the world.

Girl : Pretty as women?

(J. Galsworthy: *Escape*)

どうしようなのが見受けられる。元來 as bad as a woman とどう直喩があるのに対して、女性自身が *Pretty as women?* と男性に問うかけた所、面白い対話である。

「美」に対して「醜」を示す代表的な形容詞としては *ugly* があるが、直喩となつてこれと結合する名詞としては *sin* が一般的であり、これに次いで *toad*, *corpse*, *beast*, *octopus*, *horse's head* 等の類がある。文学作品では「醜」についての直喩はあまり見当らなうが、

Always between the sky and their earth the miners saw the unhallowed, grim, irregular mass of the coal-breaker, a tall structure black with dust, ugly as a giant toad. It dominated the whole valley.

(Michael Gold: *120 Million*)

とゴールドは「一億二千万」の最初の短篇 *Coal-breaker* の初頭に右の文章を用いて、炭坑夫の悲惨な生活を支配する *coal-breaker* を *ugly as a giant toad* と述べて、此作全体にわたつて暗々と醜さを暗示してゐる。

次に「硬軟」を示す直喩に筆を進めよう。日本語で「固い」ことのとえに「金鉄の如し」「鉄石の如し」「石部金吉金兜」等、鉱物が用ゐられてゐるが、英語でも *hard* とどう形容詞に対して *rock*, *stone*, *flint*, *granite*, *marble*, *iron*, *steel*, *nails*, *adamant*, *brick*, *netherstone* 等の他に *bullet*, *table*, *Severn salmon*, *bone* を用ゐられてゐる。iron のような名詞はありふれてゐるだけに、何処で用ゐても無難であるから、

His arm was as hard as cast-iron. (O. Henry: *The Higher Pragmatism*)

.....he can never be kept beating off a lee-shore a whole frosty night when the sheets are as hard as iron.

(R. L. Stevenson: *Inland Voyage*)

.....and the ground was as hard as iron.....

(Oscar Wilde: *The Birthday of the Infanta*)

の三例で見られるように、arm, sheets, ground と三種の全く性質を異にした事物が、何れも hard と結合してそのことは興味深し。hard が女性のきしよなき表情に door knob と結びつきた珍しき例では、

Mrs. Curfew is as hard as a door knob.

(Richard Connell: *The Impossible Prates*)

が見出される。

hard の他に solid, stiff の二形容詞について次のような例がある。

His stout back was solid as wood.

(K. Mansfield: *The Escape*)

Why, it's (it=the paw) as stiff as bone.

(W. W. Jacobs: *The Monkey's Paw*)

やじ hard と対して soft の方は soap, silk, silk-worms, swan's down, lady's skin のよむに頭韻をふんだ名詞 primrose, bank of moss, turnip, air, cloud をあそぶ。

次に「冷暑」について考察すると、最も一般的なのは日本語同様 ice である。其他 frost, snow, stone, marble, clay, death, earth, well, well-water, paddock, frog, dog's nose, maid's knee, rat, 等実に種々様々な名詞に加えて Christmas, key, clock, charity なども用いられる。その有様は、イギリス人の「冷」に対する感覚は実に複雑多岐を極めてゐる。実際の用例として、

Oh! Ut's cold as ice. Oh! no! Shure, an' he's niver——!

(J. Galsworthy: *Old English*, III iii)

.....but the sweat streamed on his face as thick as the rain and as cold as the well-water.

(R. L. Stevenson: *The Bottle Imp*)

She was as dead as Caesar, poor wench, and as cold as a church. (R. L. Stevenson: A Lodging for the Night)
等が見当るが、church が「寒冷」と結ばれるのは charity の場合と同様、奇異な感を与えらる。

cold と対して hot としては love, love nine days old (有名な) 般的なものその他 Old Sam's kitchen, black pudding 等があるが hot を伴わなすべ like ovens と暑気を示した一例として、

It was the first Saturday afternoon in August; it had been broiling hot all day, with a cloudless sky, and the sun had been beating down on the houses, so that the top rooms were like ovens.....

[Maugham: *Liza of Lambeth*, chapter I]

がある。

「酔態」を示す直喩は drunk と結んで実に多数の名詞によつて作られてゐる点、日本語の「泥酔」「虎となす」等二三の酔態語とは比へものとなる程酔態万姿と云つた感である。即ち fiddler, lord, piper, Pope, M. P., beggar, parson, tinkler, Chlce, Bacchus, devil, witch, fish, sow, rat, pig, fiddler's bitch, biled owl, Davy's sow, David's sow, fly, owl, magpie, beast, mouse, bear, ass, fire, blood, blazes, pickings, brewer's fart, wheelbarrow 等枚挙に及ぶまゝだが、其他の名詞を現代作家が用ひる例として、horse fly, monkey を用ひる。

Drunk as horse fly!

(Clifford Odets: *Golden Boy*)

I was a bridemaïd. I came into her room half an hour before the bridal dinner and found her lying on her bed as lovely as the June night in her flowered dress — and as drunk as a monkey.

(F. S. Fitzgerald: *The Great Gatsby*)

「確實性」を表現する直喩としては形容詞に sure が用ゐられるが、これと結ばれる名詞は可成りの数に上つてゐる。

即ち 'gun, death, fate, 少くも変じたのひは as sure as eggs is eggs がある。文法的には間違ひつゝるが、次のような説明が Brewer's Dictionary of Phrase and Fable の中の *sealed up* である。

Professor de Morgan suggested that this is a corruption of the logician's formula, "x is x".

併し作家によつては as sure as eggs is eggs の形を文法通り *as sure as eggs were eggs* として用いた例が次に示す通り見受けられる。

"Outrunning the constable" was the phrase which would leap to his lips as sure as eggs were eggs.

(Siegfried Sassoon : *Memoirs of a Fox-hunting* Part VIII, iv)

更にこれを圧縮して *sure as eggs* の形にして、

Seven Guv 'nor——don't do it. There ain't a chance in a million. You 'll only get pneumonium in this stinkin' wet, and they 'll have you into the bargain, sure as eggs——bread and water, cells, and the rest of it.

(John Galsworthy : *Escape*, Part I)

「確実性」に用ゝられ名詞は既述のものが最も一般的であるが、更に 'Bible, Judgment, March in Lent, Devil, Old Bogie, Lucifer, Satan, Old Nick 等宗教的色彩を帯びたもの、又 nail, gold, day 等もある。又日本では古来「うぬぼれとかさけのなすものはなす」といふさか不潔な表現があるが、英語にも as sure as a louse in posom と云ふ日本語に劣らざる上品でないものがあり、イギリスでは古くから税金に頭を悩ましたものか、death 同様 taxes も sure と結ばれてゐる。其他 'Burton's bank, D. T. (=delirium tremens) 皮肉な表現には as sure as sealed with butter の類があり、単一の名詞でなく表現では、先きに述べた *eggs is eggs* の他に 'you're born, I am sitting, I am standing, I breathe 等が as sure as の次に用ゝられる。これに類した実用例としては as, sure as I'm alive. といふ形が John Ervine の *The First Mrs. Fraser* の中に見受けられる。又一般に用ゝられる名詞と少し変じたものを使

[O. Henry : *The Moment of Victory*]

日本語に「猫に鯉節」という表現があるが、英語国民にとつてはこの言葉のもつ深い意味は鯉節の味を知らねば納得できなうであらう。同じように、我々日本人も mouse と cheese との関係が、日常生活に織り込まれていないから、直接に強い印象をあたえられないが、幸福感を表現するのに、そういう英語的表現をうまく取入れたのが次の実例である。

I am at Bracey's Giant Emporium, as happy as a mouse in the middle of an immense cheese, and the world shall know me no more.
(John Collier : *Evening Primrose*)

「幸福感」を表現するたどえに英語では可成り多数の事物を用ゐることは既に述べた通りであるが、これと凡そ正反対の「死」を示す直喩もそれに用ゐる名詞の数は決して少くはない。即ち herring, shotten herring, small bear, maggot, smelt, nit, mackerel, dog in ditch, mole, toad's skin, mutton 等の動物及びそれに関した名詞、更に dodo の如く絶滅した鳥名もよく用ゐられてゐる。又固有名詞を用ゐた場合は Julius Caesar, Queen Elizabeth, Queen Anne 等がある。たとえば先にも引用したが、

She was as dead as Caesar, poor wench, and as cold as a church.
(R. L. Stevenson : *A Lodging for the Night*)

に於ける使用例は後にしつゝ as cold as a church と相まつて雪中に死体を横える哀れな女性の姿をよく描出してゐる。生物以外では pit, nail in a coffin, rag, door-nail 等がある。例えばシエクスピアも

Come thou and thy five men, and if I do not leave you all as dead as a door-nail, I pray God I may never eat grass more.
[2 King Henry VI, iv, 10]

とつうように「息の根を止める」とつた強い感じを表現する時に用ゐてゐる。

以上で直喩に用ゐられる形容詞で最も多くの事物、人物と結合するものを実例を挙げて考察したのであるが、英語直喩

には、'更だ' as blind as a bat, as proud as a peacock, as fit as a fiddle, as weak as water 等、百數十に及ぶ頭韻をふんだもの、又 as welcome as snow in the harvest, as big as a bean's knee, as seasonable as snow in summer, as clear as mud, as like as chalk and cheese, as rich as a new shorn sheep, as full of money as a toad is of feather 等、数十に及び皮肉なものもあつて、考察の価値があるが、紙面の関係もあるので、ここを筆をおいて一応かつて「人文研究」に連載した「英語直喩の考察」の最終篇としておく。